Author 望月、東子(Monlzuki, Noriko) Publisher 屋鹿義塾大学 Publication year 2020 Jittle 学事振興資金研究成果実織報告書 (2019.) Abstract 特別のでは、フランス「古典主義」美術を代表する画家ニコラ・ブッサン(1594-1665)の後期が高を対象に、3年計画で実施してきたものである。ブッサンは、画家としての活動のほとんど、ローマで行ったが、後が後半生に手掛けた宗教画は、教会のための公的な装飾画では数く、イタリアや目の会様景野家に向けた中型のグゴローであり、ローマ・バロック美術には全く、異なる性格を持っている。とりわけ、フランス人殿客に向けて指かれた作品群は17世紀後半り降のフランス上始絶画彫刻アカデミーの理論に大きな影響を及ぼし、近世の歴史画を考える上で、東美な課題と言える。最初の2年間で取り上げたのは、ブッサンガ、1650年前後と17ランス人麗客に向けて指かれた作品群は17世紀後半り展のフランストローで取り上げたのは、ブッサンガ、1650年前後と17ランス人麗客に向けて指かれた作品群は77世紀を半り展、何月を寝まずリスト》(1650)と一連の「聖家族」(1648-61)である。様式分析と、イコノラフィ上の分析に加え、注文主側の宗教信をや絵画収集活動との関連について検討を加えた。東京とからがした。最終年である今年度は、これまでの成果を踏まえ、ブッサンが、5日の遺窟アンドレ・ル・ノートルのために描いた、ギリストと奏淫の女(1653)について接対の方で、イエスの教えとよる「霧空」と「結婚」についての教訓的な歌味を玩きつかにた。ル・ノートルルの収集活動におけて、キリストと奏淫の女(1653)について辞細に分析した。ル・ノートトルのために描いた、ギリストと奏淫の女(1653)について辞細に分析した。ル・ノートトルのな表情を野家でもあった。この研究では、ブッサンが、同主題の伝統的な表現法とは異なる独自の手法を用いながら、旧中体法と対置する形で、イエスの教えとよる「霧空」と「結婚」についての教訓的な歌味を玩きつからにた。同時に、ル・ノートルの収集活動におけでカンス。本作品の位置づけについて研究では、ブッサンの作品の独自性と、その意味を示さたができた。This study concerns the late religious paintings created by Nicolas Poussin (1594-1665), a painte who represents the 17th century French "classicism," and has been conducted under a three-year plan、Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted under a three-year plan Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted under a three-year plan Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted under a three-year plan、Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted under a three-year plan Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted under a three-year plan、Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted under a three-year plan Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted under a three-year plan Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted under a three-year plan Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted in for her pe	Keio Associated Reposi	itory of Academic resouces						
Publisher	Title	二コラ・プッサンの後期宗教画に関する総合的研究						
Publisher 関連整数大学 Juliu 学事振興責金研究成果実績報告書 (2019.) JaLC DOI Abstract 本研究課題は、フランス「古典主義」美術を代表する画家ニコラ・ブッサン(1594-1665)の後期 教画を対象に、3年計画で実施してきたものである。ブッサンは、画家としての活動のほとんど、ローマで行ったが、彼が後半生に手掛けた宗教画は、教金のための公的な装飾画や祭植画ではくく、イタリアや昭原の美術愛好家に向けた中型のダブローであり、ローマ・バワック美術には全く、異なる性格を持っている。とりわけ、フランス人顧客に向けて猫のからの。最初なたに選挙、降のフランス工正絵画彫刻アカデミーの理論に大きな影響を及ぼし、近世の歴史画を考えが長に、プリンス・1650年前後にフランス人顧客に向けて描いる。最初の2年間で助り上げたのは、ブッサンが、1650年前後にフランス人顧客に向けて描いた宗教観、信人を簡もサリスト》(1650)と一連の「聖家族」(1648-51)である。様式が折に、イフノラフィエの分析に加え、注文主側の宗教信念や給画収集活動との関連について検討を加えた。それによって、画家が作品に込めた聖書状養上の寓意を新たに提示し、さらに当時のランスの美術愛好家たちの間でのブッサン評価を精査することにより、彼の作品がもつ同時代的な意味を等らかにした。最終年である今年度は、これまでの成果を踏まえ、ブッサンが、王の造園家アンドレ・ル・ノートルのために描いた。オリス・クトルのために描いた。大きによって、画家が作品に込めた聖書状養上の寓意を新たに提示し、すらに当時のようないの表が信と、イナスの教芸による「落座」と「結婚」についての教訓的な意味を伝える*penseを推進したことを、当時の結婚観やアランス・カトリック破音の観点に基づいで明らかにした。同時に、ル・ノートルの収集活動における、本作品の位置づけについて考察を加えた。本研究課を通じて、ブッサンスの養が愛好家に向けたタブローとしての宗教画という、ブッサンの作品の独自性と、その意味と役割を示すことができた。 This study concerns the late religious paintings でeated by Nicolas Poussin (1594-1665), a painte who represents the 17th century French "classicism," and has been conducted under a three-year plan. Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted in Rome、the religious paintings to set of the Royal Academy of Painting and Sculpture since late 17th century French "classicism," and has been conducted under a three-year plan. Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted in Rome、the religious paintings to set after the Royal Academy of Painting and Sculpture since late 17th century French "classicism," and has been conducted in Rome、the religious paintings to set after the Royal Academy of Painting and Sculpture since late 17th century. The first two years of this study covered religious themes created by Poussin for the French audience in the early 1650s: Christ Healing the Blind (1650, Louvre Museum) and a series of "the Healing the religious and incongraphy analysis, the relationship between the religious convictions of the clients and activities concerning the collection of p	Sub Title							
Publication year 2020 Jittle 字事規貫資金研究成果実績報告書 (2019.) Jatc DOI Abstract 本研究課題は、フランス「古典主義」美術を代表する画家ニコラ・ブッサン(1594-1665)の後期が高を対象に、3年計画で実施してきためである。プッサンは、画家としての活動のほとんどローマで行ったが、彼が後半生に手掛けた宗教画は、教会のための公的な発画ではなく、イタリアや母国の美術変好家に向けた中型のタブローであり、ローマ・パロック美術自とは全く異なる性格を持っている。とりわけ、フランス人顧客に向けて描かれた作品群は「7世紀後半以降のフランス王立絵画彫刻アカデミーの理論に大きな影響を及ぼし、近世の歴史画を考える上で重要な課題と言える。最初の2年間で取り上げたのは、ブッサンが、1650年前後にフランス人顧客に向けて描いた宗教題、(首人を遵す中リスト) (1650) と一連の「聖診疾」(1648-51) である。後式分析た、イコノフラフィ上の分析に加え、注文主側の宗教信条や絵画収集活動との関連について検討を加えた。それによって、画家が作品に込めた聖書宗教上の寓意を新たに提示し、さらに当時のプランスの美術変好家たちの間でのブッサン評価を精査することにより、後の作品がもつ間時代的な意味を明らかした。。 最終年である今年度は、これまでの成果を酵まえ、ブッサンが、巨力の伝統的な表現法とは異なる独自の手法を用いながら、旧い律法と対置である。といいで表述の伝統的な表現法とは異なる独自の手法を用いながら、旧い律法と対置では、ファナンが、同主題の伝統的な表現法とは異なる独自の手法を用いながら、旧い律法と対置では、ファナンが、同主題の伝統的な表現法とは異なる独自の手法を用いながら、旧い律法と対置では、ファナンが、同主題の伝統的な表現法とは異なる独自の手法を用いながら、出い場法と対理なら形で、イエスの教えによる「発深」と「結婚」についての教訓的な意味を伝える『Pensee"を描さ出したことを、当時の結婚やフランス・カトリック改革の観点に基づいて明らかにした。同時に、ル・ノトルの収集活動における、本作品の位置づけについて考察を加えた。本研究課題を通じて、フランスの美術変好家に向けたタブローとしての宗教画は大き、ブッ中の年品の独自性と、その意材と役割を示すことができた。 This study concerns the late religious paintings created by Nicolas Poussin (1594-1665), a painte who represents the 17th century French "Classicism," and has been conducted under a three-yeap lan. Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted in Rome, the religious paintings he worked on during the second half of his life presented erroing and Sculpture since late 17th century. The first two years of this study covered religious themes created by Poussin for the French audience in particular, had a significant impact on the theoretical concepts of the Royal Academy of Painting and Sculpture since late 17th century. The first two years of this study covered religious themes created by Poussin for the French audience in the early 1650s: Christ Healing the Blind (1650, Louvre Museum) and a series of "the Royal Academy of Painting and Sculpture since late 17th century. The first two years of this study some of the Royal Academy of Painting and Sculpture since late 17th century. The	Author	望月, 典子(Mochizuki, Noriko)						
Jatic DOI Abstract 本研究課題は、フランス「古典主義、美術を代表する画家ニコラ・ブッサン(1594-1665)の後期が高を対象に、3年計画で実施してきたものである。プッサンは、画家としての活動のほとんど、ローマで行ったが、彼が後半生に手掛けた宗教画は、教会のための公的な装飾画や祭壇画ではなく、イタリアや母国の美術愛好家に向けた中型のタブローであり、ローマ・バロック美術とは学り、降のプランス王直袖画形刻アカデミーの理論に大きな影響を及ぼし、近世の歴史画を考える上で重要な課題と言える。 最初の2年間で取り上げたのは、プッサンが、1650年前後にフランス人願客に向けて描かた。宗教題、(盲人を癒すキリスト)(1650)と一連の「聖家族」(1648-51)である。様式分析と、イコノラフィエと協って、大変技術をは高いなかと聖客歌集しの寛楽を別していて検討を加えた。それによって、画家が作品に込めた聖客歌集はの意を新たに提示し、まら生間のラランスの実術を経りまた。それによって、画家が作品に込めた聖客歌集にの意を新たに提示し、まらと当のフランスの実術を対応品に込めた聖客歌集にの意を新たに提示し、まらと前のフランスの実術を対応品に込めた聖客歌集にの意を新たに提示し、まらと当のフランスの実術を対応品に込めた聖客歌集に展示しまり、彼の作品がもつ同時代的な意味を呼らかじした。 最終年である今年度は、これまでの成果を踏まえ、ブッサンが、王の連園家アンドレ・ル・ノートルのために描いた。キリストと姦運の女》(1653)について詳細に分析した。ル・ノートルは、ブッサンの重要な宗教画を複数所有する美術変好家であった。この研究では、ブッサンバートルは、ブッサンの重要な宗教画を複数所有する美術変好家であった。この研究では、ブッサンバートルは、ブッサンの重要な宗教師を複数所有する美術変好家でもあった。この研究では、ブッサンバートルの業活動における、本作品の位置づけについて考察を加えた。本研究課題を選じて、マラザと役割を済まことができた。 This study concerns the late religious paintings created by Nicolas Poussin (1594-1665), a painte who represents the 17th century French "classicism," and has been conducted under a three-year plan. Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted under a three-year plan. Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted in Rome, the religious paintings the worked on during the second half of his life presented entirely different characteristics from Roman Barcque Art and were created by Nicolas Poussin for the French audience in the early 1650s Christ Heading the Bind (1650, Louvre Museum) and a series of "throw simed at the French audience a princiular, had a significant impact on the theoretical concepts of the Royal Academy of Painting and Sculpture since late 17th century. The first two years of this study covered religious themes created by Poussin for the French audience in the early 1650s Christ Heading the Bind (1650, Louvre Museum), and a series of "throw farm and activities concerning the collection of painting were analyzed. The exceptical symbolism represented in Poussin's tableaux sainfed	Publisher							
Jaticle 学事振興資金研究成果実績報告書 (2019.) Abstract 本研究課題は、フランス「古典主義」美術を代表する画家ニコラ・ブッサン(1594-1665)の後期が高を対象に、3年計画で実施してきたものである。ブッサンは、画家としての活動のほとんど、ローマで行ったが、彼が後半生に手掛けた宗教画は、教金のための公的な装飾画や祭環画ではなく、イタリアや母国の美術受好家に向けた中型のタブローであり、ローマ・バリンの美術とは学し、異なる性格を持っている。とりわけ、フランス人題客に向けて描かれたの歴史画を考える上で重要な課題と言える。 最初の2年間で取り上げたのは、ブッサンが、1650年前後にフランス人観客に向けて指かた、イコノラフィ上の分析に加え、注文主側の宗教信条や絵画で表している。機能のフランスの実施を考える上で重要な課題と言える。 最初の2年間で取り上げたのは、ブッサンが、1650年前後にフランス人観客に向けて指かた。不知、低く首人を癒すキリスト》(1650)と一連の「聖家族」(1648-51)である。様式分析に、イコノラフィ上の分析に加え、たま文主側の宗教信条や絵画で展示しの関連を新たに提示し、さらに当成ってランスの実術変好象たちの間でのブッサン評価を構造することにより、彼の作品がもつ同時代的な意味を明らかじした。 最終年である今年度は、これまでの成果を踏まえ、ブッサンが、王の適園家アンドレ・ル・ノートルのために描いた。キリストと姦運の女》(1653)について詳細に分析した。ル・ノートルは、ブッサンの画要な宗教師を複数所有する美術変好系でもあった。この研究では、ブッサンが、自主題の伝統的な表現法とは異なる独自の手法を用いながら、旧い律法と対理する形で、イエスの教えによる「姦運」と「結婚」についての教訓的な意味を伝える「Panseeで表で書せいたた。と、当時の経験地マランス・カトリックな家の観点に基づいて明らかにした。同時に、ル・ノートルの映楽活動における、本作品の位置づけについて考察を加えた。本研究課題を通じて、フランスの美術受好家に向けたタブローとしての宗教画という、ブッサンの作品の独自性と、その意味と役割を示すことができた。 This study concerns the late religious paintings created by Nicolas Poussin (1594-1665), a painte who represents the 17th century French "classicism," and has been conducted under a three-year plan、Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted in Rome, the religious paintings he worked on during the second half of his life presented entirely different characteristics from Roman Barcque Art and were created in the form of fableaux aimed at at lovers in Italy and France. The series of artwork aimed at the French audience in particular, had a significant impact on the theoretical concepts of the Royal Academy of Painting and Sculpture since late 17th century. The first two years of this study covered religious themes created by Poussin for the French audience in particular, had a significant impact on the theoretical concepts of the Royal Academy of Painting and Sculpture since late 17th century.	Publication year							
Abstract 本研究課題は、フランス「古典主義」美術を代表する画家ニコラ・ブッサンは、画家としての活動のほとんど、ローマで行ったが、彼が後半生に手掛けた常教画は、教会のための公的な装飾画や祭増画ではなく、イタリアや母国の美術愛好家に向けた中型のタブローであり、ローマ・バリン美術とは全く異なる性格を持っている。とりわけ、フランス人顧客に向けて指かれた作品群は「世紀後半」降のフランエ立絵画彫刻アカデミーの理論に大きな影響を及ぼし、近世の歴史画を考える上で重要な課題と言える。 最初の2年間で取り上げたのは、ブッサンが、1650年前後にフランス人顧客に向けて描かれた作品群は「世紀後半」降のフランス工並絵画彫刻アカデミーの理論に大きな影響を及ぼし、近世の歴史画を考える上で重要な課題と言える。 最初の2年間で取り上げたのは、ブッサンが、1650年前後にフランス人顧客に向けて描れた宗教題、《首人を癒すキリスト》(1650)と一連の「聖潔家」(1648-51)である。様式分析と、イコノフラフィ上の分析に加え、注文主側の宗教信条や絵画収集活動との関連について検討を加えた。それによって、画家が作品に込めた聖書釈養上の寓意を新たに提示し、さらに当時のフランスの美術変好象たちの間でのブッサン評価を精査することにより、彼の作品がもつ同時代的な意味を明らかにした。 最終年である今年度は、これまでの成果を踏まえ、ブッサンが、三の連場でいた。「おした。」、よれ、アッサンの重要な宗教画を複数所有する美術変好象でもあった。この研究では、ブッサンが、同主題の伝統的な表別法とは異なる独自の手法を用いながら、旧い律法と対質も表示して、ブッサンの重な宗教画を複数所有する美術変好象でもあった。この研究では、ブッサンが、同主題の伝統的な表別法とは異なる独自の手法を用いながら、出い律法と対音を表示していた。同時に、ル・ノートルの収集活動における、本作店面の位置づけこついて考察を加えた。本研究課題を通じて、フランスの美術変好家に向けたタブローとしての宗教画という、ブッサンの作品の独自性と、その意味と後書でするできた。 This study concerns the late religious paintings revaled in how hor represents the 17th century French "classicism," and has been conducted under a three-yeaplan. Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted in Rome, the religious paintings he worked on during the second half of his life presented entirely different characteristics from Roman Baroque Art and were created in the form of tablesumed at at lovers in Italy and France. The series of artwork aimed at at the form form form the radion of painting were analyzed. The exegetical symbolism represented in Poussin's tableaux was clarified along with the contemporary meaning of his works by conducting a detailled examination of his reputation and lovers in Italy and France. The series of artwork aimed at the French audience in the early 1650s: Christ Healing the Blind (1650, Louvre Museum) and a series of "the Holy Family" (1648-51) in addition to stylistic analysis and iconography analysis, the relationship between the religious convictions of the clients and activities concerning the collection of painting were analyzed. The exegetical symbolis	•	学事振興資金研究成果実績報告書 (2019.)						
本研究課題は、フランス「古典主義」美術を代表する画家二コラ・ブッサンは、画家としての活動のほとんどローマで行ったが、彼が後半生に手掛けた宗教画は、教会のための公的な装飾画や発達画ではなく、イタリアや母国の美術愛好家に向けた中型のタブローであり、ローマ・パロック美術とは全く異なる性格を持っている。とりわけ、フランス人顧客に向けて描かれた作品は「世紀後来」と降のフランス王立絵画彫刻アカデミーの理論に大きな影響を及ぼし、近世の歴史画を考える上で重要な課題と言える。 最初の2年間で取り上げたのは、ブッサンが、1650年前後にフランス人顧客に向けて描いた宗教題(音人を動す・リスト)(1650)と一連の「聖家族」(1648-51)である。様式分析と、イコノラライ上の分析に加え、注文主側の宗教信条や絵画収集活動との関連について動きが前となって、れてよって、画家が作品に込めた聖書宗義上の實意を新たに提示し、さらに当時のフランスの美術変好家たちの間でのブッサン評価を精査することにより、彼の作品がもつ同時代的な意味を明らかたにした。最終年である今年度は、これまでの成果を踏まえ、ブッサンが、正の造園家アンドレ・ル・ノートルのために指いた(キリストと奏室の女)(1653)について詳細に分析した。ル・ノートルル、ブッサンの重要な宗教画を複数所有する美術変好家でもあった。この研究では、ブッサンが、同主題の伝統的な表現法とは異なる独自の手法を用いながら、旧い律法と対置もあれて、イススの教術に受ける大きによる「簽定」と「結婚」についての教訓的な意味を伝える「pensee"を描き出したことを、当時の結婚後でランス・カトリック数を可能とは近れて、ランスの美術愛好家に向けたタブローとしての宗教画という、ブッサンの作品の独自性と、その意味と役割を示すことができた。 This study concerns the late religious paintings created by Nicolas Poussin (1594-1665), a painte who represents the 17th century French "classicism," and has been conducted under a three-year plan. Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted under a three-year plan. Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted under a three-year plan. Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted under a three-year plan. Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted under a three-year plan. Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted under a three-year plan. Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted under a three-year plan. Although the majority of Poussin's activities as a painter was considered in patricular, had a significant impact on the theoretical concepts of the Royal Academy of Painting and Sculpture since late 17th century. The first two years of this study covered religious themes created by Poussin for the French audience in the early 1650s: Christ Healing the Blind (1550, Louvre Museum) and a series of "the Holy Family" (1648-51). In addition to stylistic analysis and iconogra								
religious paintings as tableaux aimed at the French audience. Notes	Abstract	最初の2年間で取り上げたのは、プッサンが、1650年前後にフランス人顧客に向けて描いた宗教主題、《盲人を癒すキリスト》(1650)と一連の「聖家族」(1648-51)である。様式分析と、イコノグラフィ上の分析に加え、注文主側の宗教信条や絵画収集活動との関連について検討を加えた。それによって、画家が作品に込めた聖書釈義上の寓意を新たに提示し、さらに当時のフランスの美術愛好家たちの間でのプッサン評価を精査することにより、彼の作品がもつ同時代的な意味を明らかにした。最終年である今年度は、これまでの成果を踏まえ、プッサンが、王の造園家アンドレ・ル・ノートルのために描いた《キリストと姦淫の女》(1653)について詳細に分析した。ル・ノートルは、ブッサンの重要な宗教画を複数所有する美術愛好家でもあった。この研究では、プッサンが、同主題の伝統的な表現法とは異なる独自の手法を用いながら、旧い律法と対置する形で、イエスの教えによる「姦淫」と「結婚」についての教訓的な意味を伝える"pensée"を描き出したことを、当時の結婚観やフランス・カトリック改革の観点に基づいて明らかにした。同時に、ル・ノートルの収集活動における、本作品の位置づけについて考察を加えた。本研究課題を通じて、フランスの美術愛好家に向けたタブローとしての宗教画という、ブッサンの作品の独自性と、その意味と役割を示すことができた。 This study concerns the late religious paintings created by Nicolas Poussin (1594-1665), a painter who represents the 17th century French "classicism," and has been conducted under a three-year plan. Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted in Rome, the religious paintings he worked on during the second half of his life presented entirely different characteristics from Roman Baroque Art and were created in the form of tableaux aimed at art lovers in Italy and France. The series of artwork aimed at the French audience in particular, had a significant impact on the theoretical concepts of the Royal Academy of Painting and Sculpture since late 17th century. The first two years of this study covered religious themes created by Poussin for the French audience in the early 1650s: Christ Healing the Blind (1650, Louvre Museum) and a series of "the Holy Family" (1648-51). In addition to stylistic analysis and iconography analysis, the relationship between the religious convictions of the clients and activities concerning the collection of paintings were analyzed. The exegetical symbolism represented in Poussin's tableaux was clarified along with the contemporary meaning of his works by conducting a detailed examination of his reputation among art lovers in France at that time. A detailed analysis of Christ and the Woman Taken in Adultery (1653, Louvre Museum), a work painted for André Le Nôtre, the						
		Possarch Panor						
Genre Research Paper	Genre	Research Paper						

https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=2019000007-20190289

URI

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2019 年度 学事振興資金 (個人研究) 研究成果実績報告書

研究代表者	所属	文学部	職名	教授	補助額	200	(B)	千円
初元仅仅有	氏名	望月 典子	氏名 (英語)	Noriko MOCHIZUKI	柵切很	200 (1	(D)	TI

研究課題 (日本語)

ニコラ・プッサンの後期宗教画に関する総合的研究

研究課題 (英訳)

A comprehensive study on late religious paintings by Nicolas Poussin

1. 研究成果実績の概要

本研究課題は、フランス「古典主義」美術を代表する画家ニコラ・プッサン(1594-1665)の後期宗教画を対象に、3年計画で実施してきたものである。プッサンは、画家としての活動のほとんどをローマで行ったが、彼が後半生に手掛けた宗教画は、教会のための公的な装飾画や祭壇画ではなく、イタリアや母国の美術愛好家に向けた中型のタプローであり、ローマ・バロック美術とは全く異なる性格を持っている。とりわけ、フランス人顧客に向けて描かれた作品群は17世紀後半以降のフランス王立絵画彫刻アカデミーの理論に大きな影響を及ぼし、近世の歴史画を考える上で重要な課題と言える。

最初の2年間で取り上げたのは、プッサンが、1650年前後にフランス人顧客に向けて描いた宗教主題、《盲人を癒すキリスト》(1650)と一連の「聖家族」(1648-51)である。様式分析と、イコノグラフィ上の分析に加え、注文主側の宗教信条や絵画収集活動との関連について検討を加えた。それによって、画家が作品に込めた聖書釈義上の寓意を新たに提示し、さらに当時のフランスの美術愛好家たちの間でのプッサン評価を精査することにより、彼の作品がもつ同時代的な意味を明らかにした。

最終年である今年度は、これまでの成果を踏まえ、プッサンが、王の造園家アンドレ・ル・ノートルのために描いた《キリストと姦淫の女》(1653) について詳細に分析した。ル・ノートルは、プッサンの重要な宗教画を複数所有する美術愛好家でもあった。この研究では、プッサンが、同主題の伝統的な表現法とは異なる独自の手法を用いながら、旧い律法と対置する形で、イエスの教えによる「姦淫」と「結婚」についての教訓的な意味を伝える"pensée"を描き出したことを、当時の結婚観やフランス・カトリック改革の観点に基づいて明らかにした。同時に、ル・ノートルの収集活動における、本作品の位置づけについて考察を加えた。本研究課題を通じて、フランスの美術愛好家に向けたタブローとしての宗教画という、プッサンの作品の独自性と、その意味と役割を示すことができた。

2. 研究成果実績の概要(英訳)

This study concerns the late religious paintings created by Nicolas Poussin (1594–1665), a painter who represents the 17th century French "classicism," and has been conducted under a three-year plan. Although the majority of Poussin's activities as a painter were conducted in Rome, the religious paintings he worked on during the second half of his life presented entirely different characteristics from Roman Baroque Art and were created in the form of tableaux aimed at art lovers in Italy and France. The series of artwork aimed at the French audience in particular, had a significant impact on the theoretical concepts of the Royal Academy of Painting and Sculpture since late 17th century.

The first two years of this study covered religious themes created by Poussin for the French audience in the early 1650s: Christ Healing the Blind (1650, Louvre Museum) and a series of "the Holy Family" (1648–51). In addition to stylistic analysis and iconography analysis, the relationship between the religious convictions of the clients and activities concerning the collection of paintings were analyzed. The exegetical symbolism represented in Poussin's tableaux was clarified along with the contemporary meaning of his works by conducting a detailed examination of his reputation among art lovers in France at that time.

A detailed analysis of Christ and the Woman Taken in Adultery (1653, Louvre Museum), a work painted for André Le Nôtre, the principal gardener of King Louis XIV, was added in this year, the final year of this study. Le Nôtre was an art lover who owned several prominent religious paintings created by Poussin. This research clarifies Poussin's "pensée" that transmits the morals in the teachings of Jesus on adultery and marriage based on the perspectives on marriage at that time and the French Catholic Reformation and using a unique method by Poussin, which is different from the traditional methods of expression in the same subject. At the same time, this study considers the placement of his works in the activities concerning the collection of paintings by art lover Le Nôtre. This study demonstrates the meaning and role of the idiosyncrasy of Poussin's religious paintings as tableaux aimed at the French audience.

3. 本研究課題に関する発表							
発表者氏名 (著者・講演者)	発表課題名 (著書名・演題)	発表学術誌名 (著書発行所・講演学会)	学術誌発行年月 (著書発行年月・講演年月)				
Noriko MOCHIZUKI	« Que le mariage soit honorable entre tous, & la couche sans macule » : Le Christ et la femme adultère de Nicolas Poussin (1653)	étude organisée par Sakurako	2019 年 9 月				